



TITLE:

劉宰小論：南宋一郷紳の軌跡

AUTHOR(S):

劉, 子健

CITATION:

劉, 子健. 劉宰小論：南宋一郷紳の軌跡. 東洋史研究 1978, 37(1): 86-119

ISSUE DATE:

1978-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153686>

RIGHT:

劉 宰 小 論

——南宋一郷紳の軌跡——

劉 子 健 著
梅 原 郁 抄 譯

はじめに

最初にこの小論の方法、意圖といったものを列記しておきたい。まず方法的には、少數の特定の史料を十分に使いこなすことを試みた。問題によっては史料の種類は必ずしも多い必要はなく、重要な史料の精讀と分析によってかえって興味深い成果が得られるのではないかと考えるからである。第二にこれまで正しく認められて來なかつた事實の補訂を行なつてみた。それは『四庫提要』が撰者佚名とした『京口耆舊傳』は劉宰の著書であると考え、それに基いて從來あまり顧みられなかつた彼の歴史的意義を明らかにし、私なりの評價を與えたことである。ところで第三以下が本論文の主要部分なす。まず、劉宰の行動を通じて、南宋地方政治の實情を探ろうとした。そして第四に、彼を媒介に、南宋型の郷紳ともいふべき新しい類型を描いてみた。現在、各國の學者は、清代の郷紳から溯つて明代の郷紳を研究するにいたっているが、宋に關してはまだそれほど注意が拂われていない。劉宰やその周邊をみると、五代から北宋に残存する前時代の舊族や、新興の高級官僚たちとも違い、また明清時代のそれとも異なる郷紳の一類型の存在を指摘できるようである。第五に、劉宰が私的に行つた三回の飢饉救濟事業を考察してみた。そのうち一回は一萬五千の人に食を與える、個人的賑給としては類を見ない大規模なものであつた。こうした事業と關連して、最後に儒家の地域共同體（社區・社團）に對する態度に論及し

た。聖賢の書を読む多くの士大夫が、なぜ自らの郷里全體に意を注がず、また劉宰のような私的な善行が時に行なわれても、どうしてそれが民間の社團組織を發達させることに繋がらなかったのか。別の言葉で言う、中國の傳統社會では、國家の下で、宗族・家庭以外に社團組織がなぜ強くならなかったか。こうした點について若干の推論を加えておいた。

『史記』を手本とした紀傳體の史書にあって、列傳の部分の分卷排列は、人物をいくつかの類型に分けるのがきまりであった。⁽²⁾明確な特長を持つ類型には名稱がつけられ、またそれ以外のものでも、同じ卷に收められた人物の地位や事蹟によつて、その共通性を知ることができる。だが、官僚の列傳の中には、記述内容は大同小異で、列傳知互間の差異がはっきりしない場合も少くない。そこで、卷末や中間に「論」が設けられ、小類型の特徴が書きこまれている。

一家言を持つ傳統的な歴史家たちは、いつも正史列傳の分類が妥當でないと批判し、新しく編纂し直された史書では、序文や凡例で、列傳の構成や次序の改訂に觸れるのがしきりにさえなっている。しかし、傳統的な紀傳體の列傳の分類は、常に既成觀念、ときに偏見の枠にとられがちで、現代の學者にとって賛成できかねる部分が少くない。⁽³⁾私は、正史類の「論」は修辭が多すぎ、「以文害義」に走りがちで、必ずしも理想的な標準ではなく、また同一列傳に共通する小類型さえも十分説明しきっていないと考えている。そこで、劉宰を具體例にとつて、それを證明し、あわせて、新しい類型をも提出してみようと思う。

劉宰（一一六五—一二三八）の傳は、『宋史』卷四〇一、『宋史新編』卷一五四にあり、内容はほぼ同じである。⁽⁴⁾とりあえず、卷末の「論」をみると、『宋史』ではこの卷の人物を、出處不齊、同歸于是而已と片付け、最後に劉宰に論及して飄然遠引、屢徵不起と評している。『宋史』がこの卷の冒頭に他の人物とあまり關係のない辛棄疾を置いていることは妥當でない。『宋史新編』は流石に彼を除くとともに、卷末の「論」でも、崔與之と劉宰は官を去つて再び仕えなかった者、⁽⁵⁾王遂ら六人は出仕しても權勢に阿らなかつた者として扱っている。⁽⁶⁾

傳統的な正史列傳の視點からみれば、ここでは出仕するか否かが重要なポイントとして考えられている。しかし問題は「出」仕よりも彼の自「處」にある。いったい、正史やそれに倣った史書では、官僚の言行を偏重しすぎており、社會活動を等閑に附す嫌いがある。劉宰が再び出仕しなかったような問題は、彼の賑飢をはじめとした善行とくらべたいしたことではない。彼の文集である『漫塘文集』の親友王遂の序や、明代の王梟の序では、この點賑飢などの重要性を明晰に指摘している。私見によれば、劉宰は、郷居の紳士が私人の地位で社區の福利、とりわけ救濟事業に盡力したという、南宋の一つの新しい列傳の類型を代表する人物に他ならない。儒家の官僚主義的立場にとらわれている上に、『宋史』は十分に根本史料、つまり劉宰の『漫塘文集』を見ることもなかったろうし、また、柯維騏や陸心源らの宋代史の専門家たちでさえ、『京口耆舊傳』の劉宰傳が最も主要な史料であることに氣付かなかった。以下まず、劉宰と『京口耆舊傳』について詳べ、それによって、彼の簡単な傳記を描いてみることにしよう。

第一章 劉宰の簡譜

『京口耆舊傳』に劉宰の傳が載せられているといえ、この書が彼の著作であることに疑問を持たれる方もあろう。『四庫提要』の作者はこのためか、深く調べずに佚名撰としてしまったように思われる。だがこの書は確かに劉宰の著書であり、卷末におかれた彼の傳は、その息子が増補したものに他ならぬ。粵雅堂叢書の現行本には、鎮江の横山郷人陳慶年の『類稿』の考證に依據した余嘉錫の『四庫提要辨證』を附載している。その大要は以下の通りである。『漫塘文集』の「回知鎮江史侍郎彌堅」によれば、史彌堅は方志編纂にあたって劉宰を招いて前輩の行治を搜訪せしめ、期年にして緒に就き、京口耆舊傳と名づけたこと、及び歴代の鎮江の名志を校訂したことが述べられている。史彌堅は嘉定六年（一二二三）に着任し、翌年、教授盧憲に方志編修を命じ、劉宰にも援助を依頼した。その翌年、劉は耆舊傳を完成し、『嘉定鎮江志』はそれを底稿とした。さらに言えば、『京口耆舊傳』では、劉宰の父の名を記さず單に居士と稱し、劉宰傳におい

ては宰を公と呼んでいる。このことからこの傳が宰の子孫の手に成ることが判る。また王遂傳でも、遂を公といっている。遂の娘は劉宰の子汝進に嫁していたから、恐らく者舊傳を増補したのは劉汝進だったのであろう。劉宰の事蹟は、従つて『京口耆舊傳』のものが一番詳しいわけである。本章では、それをもとに、簡単な彼の履歴を組み立てることにしたい。⁶⁴⁾

宰字平國。其先滄州景城人。國初徙丹陽。其後徙金壇。

兩縣とも鎮江府に屬する。徙居の原因は不明である。祖先、父親、兄弟などのことは次章に詳述する。

傳の末尾に年七十四。以疾終於家とあり、又考集中……則寶慶元年（一二二五）宰年六十。……當卒於嘉熙二年（一二三二）と夾注がつけられている。劉宰は孝宗の乾道元年（一一六五）の生まれとなるわけで、これは集中の事實とも矛盾しない。

兩貢於鄉。俱第一。其就南宮也、親舊餽贐。郡邑資送。誓不以一孔自汙。登紹熙庚戌第（元年、一一九〇）。

文集には某年十六、入郷校とある。⁶⁵⁾ 彼は確に清貧で、郷校で得るところのほか、時に家庭教師をして生計を維持した。

進士となつて二十六歳で、嘉興の陶氏を娶つた。宋の進士は概して良い家柄、金持と婚姻を結びたがつた。陶氏との結婚で陶家の家庭教師林復之を知り、理學と接することになる。

調建康之江寧尉。始至。置三帙……即手自勾校、吏不能欺、……巫風盛行。公下令保伍。互相糾察。往往改業爲農。甲寅之旱（紹熙五年、一一九四）、帥守命救荒、多所全活。

年少氣銳の宰は民間の淫祀邪教を取締り、農業を重視した。またここで初めて賑濟を経験している。なお、多分一一九三年、江寧在任中に妻陶氏を失つた。

初公與同志者、嘆世道之薄、相約終任不求舉。獨公與上元尉朱晞顔、始終不渝。張公（栻）既舉公、因語之曰、……幸一往焉。公謝……竟不往。

傳記のこうした敘述は、大抵家族が作った行狀にもとづいているから、誇張になりがちだが、ここの部分は大體事實のようだ。⁽⁹⁰⁾

調眞州法曹掾。臺郡倉庫、皆法曹所領。公出納明允、雖太守不得專。守有貪墨者、屢延公以後堂之飲、若將有所欲言。酒二三行、公輒辭去。守將代去、又爲具甚盛、且以家奴執事。甫一酌、薦書出袖間。公力辭、色厲言溫。守竟不能私。

この一段の佳話も前段と同じ調子のものである。集をみると、眞州に任命された年は一一九六年で、翌年には處州麗水の梁氏と再婚し、また父の希望を容れて、故郷で田地を買い入れている。

會漕司以朝旨下州、責有出身人狀稱不係僞學、不讀周程氏書、方許充考試。公曰、……首可斷、此狀不可得也。遂獨不與差。

寧宗時代、韓侂胄による慶元の黨禁が起り、一一九七年には、道學が僞學として排斥される。制科に擧げられる時も、僞學に係わる者でないという書狀を揃えねばならなかった。⁽⁹¹⁾劉宰は生粹の道學派ではなかったが、この種の壓迫に屈することをよしとしなかった。彼は轉運使韓梈の薦を受けて、練達科に擧げられていたのである。⁽⁹²⁾

見時學禁嚴切、上下迎承。公知時不可任、而爲養不可已。

父の歿後、劉宰は兄弟の生活をみてやらねばならず、自らも田地を購入し、やがて官を辭すことになる。

この邊りの傳は疎略であり、夾注に、此書於眞州司法之後、不書泰興令及官浙東幕。當以墓誌、補其闕。と注意している。

『宋史』などでは授泰興令とあり、文集にも年代は不明だが、泰興時代の書信を載せる。⁽⁹³⁾黨禁のため遷官を阻まれた彼は一一九六〜一二〇二年の間眞州法曹の職にあり、それが緩められた一二〇二〜三年泰興知縣に陞任し、父の死に際會する。⁽⁹⁴⁾

丁雲茅憂。服除、入京。默觀時勢、不樂仕、領嶽祠以歸。

この間につけ加えるべき事柄がある。入京は一二〇五〜六年のことで、『宋史』には韓侂胄方謀用兵、宰啓鄧友龍薛叔

似、極言輕挑兵端、爲國深害とある。⁸³⁾ 嶽祠を領したのは一二〇八年で、ここに記されるべきではない。夾注に、開禧間入浙東幕とあり、一二〇六年頃には着任している。『宋史』や『宋史新編』で浙東倉司幹官となったとあるのがこれである。さて、一二〇七年、韓侂胄は暗殺され、錢象祖が右丞相の任につき、朝政は大きく變った。錢に近い劉宰は、正人を多く用いることを進言し、さもなくば事多掣肘と警告した。ここに言う掣肘とは史彌遠の權力が巨大化することを指すものであろう。結局、錢象祖は劉の意見をきかず、政局は大きく動いたとは言え、彼にとっては朝廷は改善を行い得ぬものと考えられた。また錢と關係を結ぼうとしていると疑われることも嫌い、自ら嶽祠を乞うた。時を同じくして、彼は病を得、遂に堅く官を辭することになる。

嘉定更化、以堂審召。命且再下、不至。時相亦屢諷執政從官、貽書挽公。公峻辭以絕。

嘉定更化とは、一二〇八年、史彌遠が表面上、包容政治を行ったことを指す。⁸⁴⁾ 堂審とは通常の陞進コース（常資）に拘泥せぬ、大臣の特別推擧によるものである。劉宰はこうした手口に乗らず、たびたびの堂審の命にも病氣を理由にして終始應じなかった。⁸⁵⁾

黃公度制置江淮、屢書挽之入幕。公曰、君召不往、矧可爲帥府屈。

文集の「病鶴吟」はこの黃度に獻呈されている。その序には、忽冒公舉、……上玷師門とある。師門とはここでは考官の關係を指す。

傳は次に辛巳の歲、即ち一二二一年の事柄を述べるが、時間的にそれ以前に觸れておくべき問題がある。

名塘曰漫、自號漫塘病叟。塘之渭有田數畝。

劉宰は父の歿後、田産を兄弟にわかち、官を辭したのち、復買田百畝、於是仰以自給。したが祠官の俸給の方は受取ろうとしなかった。⁸⁶⁾

傳はまたやや長く、彼が官員との交際を拒んだ逸話をのせるが、この部分は少し誇張を含む。隱棲という狀況のほか

に、彼は白斑症または白癜と呼ばれる皮膚病に罹った。これは重症の場合は容貌が變るほどで、このため、彼はあまり人に會おうとしなかった。しかし、地方に於ける活動は續けられていた。

置社會……創義役……。三爲粥、以與餓者。自冬徂夏、日食凡萬餘人。……某橋病涉、某路險阻、……必捐資先倡、而程其事。公生理素薄、而見義必爲、有如此者。他如定折麥錢額、更縣斗斛如制之類、凡可以白於有司、利於鄉人者、亦無不爲也。

この部分は劉宰の行動様式が要領よく述べられている。彼は金持ちではなかったが、郷紳として官と交渉を持つことができ、民間にあつて福祉をはかり、かつ私財を投げ出して救済事業に携つた。こうした彼の活動を傳は十分に書きとめていない。いま年代順に拾うと次のようになる。官を辭した翌一二〇九年、彼は初めて私設の粥局を開き飢民が遺棄した兒童を救済した。一二一五年、鎮江知府史彌堅は劉宰に官の賑濟事業への参加をよびかけたが、彼は自著の『荒政編』を參考に送っただけであつた。⁽⁶³⁾一二一九年には夫人梁氏が世を去っている。⁽⁶⁴⁾

辛巳之夏、俄取考功曆、題百餘言、以述其志。

辛巳は一二二一年。考功曆とは他人を保舉したり、自ら官資等を記載しておく重要な文書。彼はここに、仕官の意なきことを明記した。⁽⁶⁵⁾一二二四年、彼は第二回目の私設粥局を開き、舊曆四月の初めには一萬五千人もの飢民に食を給する最高記録を作つた。⁽⁶⁶⁾彼の聲望は國都杭州に傳わるほど高まる。

上初即位、渴注名譽。除令籍田、辭。

一二二五年、史彌遠の力によって理宗が即位した。史は自己への惡評を消すために、殊更正人を招聘し、⁽⁶⁷⁾劉宰も史彌堅によってそのリストに加えられたが、劉はことの本質を見抜いており受けなかった。

改通判健康府、又辭。除直祕閣主管仙都觀。

辭退の書面は文集に見える。⁽⁶⁸⁾この時の祠廟のポストで以前のように給與を受取つたかどうかは判らない。一二二八年に

は三回目の粥局を開き、親友の王遂も参加した。⁽³⁾ 一二三三年、二十六年の長きに亘って權力を握っていた史彌遠が死に政局は轉換する。

端平元年、陞直寶謨、且盡還磨勘歲月、使轉官。

理宗が親政し、舊敵金國が蒙古に滅された。史嵩之が勢力を持っていたといえ、王遂と洪啓夔が御史に登用され、その建議で眞徳秀と魏了翁が招かれた。⁽⁴⁾ 王遂ら六・七人の友人は劉宰を推舉し、彼が辭官以後の歲月を全て資歷に數え、位階が進められた。

未幾、除奉常丞、需章五上。

太常丞の敕命は文集の附録に見える。需は辭か何かの誤りであろう。文集には辭狀が五則あり、病氣を理由としている。⁽⁵⁾ 郡太守以朝旨趨行。不得已、勉就道。至吳門、拜疏徑歸。

辭狀の第四狀には、平江にまで出かけたが、精神恍惚として舊友さえ識別できず、第五狀では實已七十歳とある。

一時譽望、收召略盡。

『宋史』『宋史新編』とも同文があるが、所不能致者、幸與崔與之耳とつけ加える。崔與之も洪啓夔らが推薦した人物で、『宋史新編』では宰と傳をとみにしている。

當宁側席、以間御史王遂、除將作少監。

當宁は誤まりであろう。『宋史』は帝側席以間、『宋史新編』は帝猶冀宰一來也と作るが、依據するところは不明である。將作少監の命にも四度辭狀をさし出している。⁽⁶⁾

鎮江防軍作亂。……闔邑奔避。公……激慰任事、集近郭隅兵備之。號令調給、皆公主之。事上聞。朝廷援廣東近比、以鄉郡屬公。命出復養。除直敷文閣知寧國府。皆不拜。進職顯謨、奉祠玉局。

鎮江の軍亂は一二三五年の出來事。⁽⁷⁾ 寧國知府任命への辭狀は文集中に見えない。

至嘉熙改元、又令赴行在奏事。謂諸子曰。吾本以病棄官、一臥三十年。晚節末路、少有不謹、必爲萬世訕。

これは一二三七年のことで翌年彼は歿する。

年七十四、以疾終於家。……郷人爲之罷市、……走送袂相屬者五十里。自遠來會者、至無所館。士祠於學。……朝廷……賜諡文清。

鎮江府金壇縣の二ヶ所の先賢祠中にはいずれも劉宰が祀られている。⁽⁶⁾ 韓侂胄、史彌遠、史嵩之と宰相が長く權力の座にあったことは南宋史の特色だが、劉宰はこうした權勢に附和せず、何回かの推挽も拒絶して、郷居して生涯を了えた。私の補訂した簡譜はここで終るが、私のいう劉宰という郷紳の一類型の輪廓は以上によっても明らかに became と思われる。

第二章 劉宰の親族

『京口耆舊傳』には劉宰の父劉蒙慶の簡単な傳が残されている。文集中の史料とあわせて、この章では宰の家族關係を述べることにしたい。

劉宰の遠祖は宋初に華北から丹陽に徙居し、少くともそれから四代は平民であつた。彼の高祖（祖父の祖父）は試將作監主簿の肩書を得て、學士刁約の堂姪女（父方の姪）を娶り、曾祖は府學内舍人となつて樞密使邵亢の姪を妻としたほか、官界とは關係がみられない。祖父劉杞の墓誌銘には、丹陽から金壇に徙つた理由を、

從弟有同居而酗酒者、先祖一無所較。密與祖妣謀、遷居金壇、以避之（文集卷三二、二四〇六葉）。

と親族内の問題に歸している。劉杞は經濟的には、屋敝且隘で常産僅自給という状態で、また、有聲場屋、甫中年即不屑事科舉と墓誌にあるように要するに科舉の失敗者だつた。彼は乏しい財をはたいて、二人の息子に良い教育を受けさせ、妻湯氏の家元上饒から家庭教師を招いたりもしたが、結局は失敗であつた。父の劉蒙慶は、劉宰の出世によつて朝奉郎を追贈されたものの、兄嗣慶とともに、皆以文行、爲郷先生といわれ、科舉失敗の家庭教師にすぎなかつた。⁽⁴⁾ 劉宰が、

父は貧に追われ碌に家にいなかったと述べているように、収入は少く、幼子を他家に養子に出すほどであった。全體として言えば、劉蒙慶の一生には言うに足ることはなく、逆にこのために、劉宰の心に、父に代って何かせねばという氣持が生まれたと思われる。粥局開設の動機や、佛寺の記文中など、宰が善舉を行なうごとに、先君之志を口にしていることからそれが窺える。⁽⁴⁴⁾

劉宰は家族のためにできる限り心をくばった。江寧に赴任して間もなく、陳氏に養子に出されていた庶弟を呼び戻し、配偶者を與え住家の世話をした。宰の配慮と處置はこまかいところまで行届いて間然するところがない。⁽⁴⁴⁾一方、宰の長兄は父と義絶して長い間身分の低い軍隊生活を送っていたが、父の死後、宰は兄を本家に迎え入れた。この兄とその家族に對しては妻の梁氏も暖い援助の手をのべ、長兄の子女たちを己の子のように扱ったことなどが、梁氏の墓誌銘に特筆されている。⁽⁴⁴⁾劉宰のこうした「孝友」には梁氏の内助とくに經濟的裏付が不可缺であった。前章でも觸れたように、最初の妻嘉興の陶氏を失い、心折骨驚した彼も、四年のち浙東處州麗水縣の梁氏を後妻に迎えた。彼女の父は侍郎であり、兄弟たちも縣丞や主簿などの地位にあった。⁽⁴⁴⁾先に言及したように、劉宰の祖父は田地を賣って子供を教育したから、残った土地は決して多くなかったろうし、たかだか家庭教師の父親はそれを増やすことなどできなかった。劉宰が眞州に赴任した時、父は金壇で田地をかう金をねだった。締思無策の彼をみて、新婚間もない梁氏は家財持物を擧げて市に鬻り、金子を整えた。

ところで、一二〇三年父が亡くなった時の宰の兄弟の状況はどうであったろうか。長兄と嫂は軍隊より戻ったが、その子供たちは宰が養っていた。劉宰は二男で、彼と同母の三男は不具廢疾⁽⁴⁴⁾、四男は既に死に、ほかに養子に出されて彼が呼返した庶弟が二人いた。宰は實際は自分が少しづつ金をためて買った田地を兄弟たちに分付して管理運営させることに決めた、梁氏もそれに同意した。

喪があけたのち、宰は氣が進まなかったが浙東倉司の幕官になった。分家したといっても兄弟たちは、彼が官職につく

ことよって得られる恩澤に魅力を感じていたことであろう。梁氏の墓誌銘には、

余既佐浙東幕、意有所不愜。將告歸。及奉旨堂審、將以疾辭。惟家人之難於忘貧也。皆私從君（梁氏）卜可否。君曰。是豈謀及婦人者哉（文集卷三三、一三葉）。

と書かれている。浙東から歸る時には、彼は自分用の田地一頃を購入していたことが知られるが、それとて當時の士大夫の水準と較べるとつつましいもので、一二〇八年、宰が官を辭した後、梁氏は、

絶肉食、去華飾、有饋者及餽餘、惟以飫兒女（文集卷三三、一三葉）。

と儉約につとめている。なおこのほか、金壇城内に宅を持ち、病氣の宰の隱居所として漫塘郷に三間の廬を結んでいた。また宰には四子があったといい、長男の劉符は仕進したかに思われるが詳しいことは判らない。末子の汝進は、王遂の娘婿となり、『京口耆舊傳』の劉宰傳を編んだと思われるが、彼も隱德不仕、以賦詠自娛。という身分であった。

以上によつて知られるように、劉宰は家柄としては別に名流というわけでもなく、地主ではあったが、多くの官僚たちと比較すれば大地主とは程遠かった。ただその郷里の水準からいうと、一面では官僚地主であり、他面在地の指導的地位に立ち得る人物としてよからう。

第三章 郷紳としての劉宰

郷紳の名望の由來する所は一つではない。名門、財産、科擧、師弟關係、識見、士大夫や地方長官との交際、學術、詩文書畫などいくつかの要素のほか、現實に人々を敬仰させる行爲も要る。劉宰の場合はどうであつたかを以下に考察してみよう。

氣鋭の二十六歳で進士科に合格した彼は、州縣の職務に携わるとともに、積極的に「事功」をうちたてんとした。この當時から、彼も人なみに國家の大計を論じている。韓侂胄の對金用兵に反對し、邊臣不善用、間言（間諜）未必實の狀態

で、侘冑は肆其淫心、以規恢復してゐると非難した。この開禧用兵が失敗したあと、宰は國政の建て直しを獻言し、詩に借りて邊臣たちへの攻撃も行った。

只今淮上未安集 二虜南望猶睢盱

要知兩淮須保障 保障一撤長江孤

邊臣之慮不及此 但知椎剝供苞直

(文集卷四、五葉、寄友詩)

このほか、科擧の各種の弊害を指摘し、漕試と太學の補試を廢止して州縣擧の推擧を用いるよう提案したり、史彌遠の「包容政治」に對して、痛い所を衝いた批判を行つたりもしたが、こうした發言が認められるような立場に彼はいなかった。彼の政見中、われわれにとって興味と價值があるのは、むしろ劉宰自身の經驗によつて記された地方行政におけるものであらう。やや煩瑣に互るが、まず彼の文章を通して、當時の地方政治の實態を覗いてみたい。

眞州の法曹掾となつた彼は、法曹の權力の大きさを次のように書きとめる。

錄事多與右獄、則與刑曹均。……法曹差獄之麗、上於府從事。與守若貳曰、未也。法曹則持之堅、辨之力。曰、當是也。乃已。守若貳雖甚敢、莫能奪。夫以一府之所是、莫能勝法曹之所非……則法曹之勢張甚(文集卷二、一七葉、眞州司法廳壁記)。

地方政府の中でも、各種の勢力と利害は錯綜しており、有效な改善策は簡單には見つからない。擯取され苦しむのは、いつも無力な人民であつた。宰は縣の主簿との對話の結果を次のような文章に纏めてゐる。

余屏居無事。飯已、卽岸巾捧腹、婆娑漫塘上。歲見吏驅民、過吾門者、踵相躡。問之、則曰、吾產去矣、而稅猶在。否則曰、吾輸竟矣、而征猶故。又不、則曰、吾稅不加益而數適增也。以是爲令長過歟。則曰、計簿是因、咎非余執也。然則執其咎者、非主簿歟。嘗試以認爲簿者、則顰頤曰、咎非吾辭、然事莫吾難也。夫鄉書手吾隸也。顧以賦役可漁利與澳

汨、朱墨不類。常自託於縣。闢門唯喏、未休、即揚去。一叱咤、輒啓露。計簿吾職也、而民戶推收、法委丞貳。一顧問、且侵官。勾校有程、吏不爲用、則散編帙庭下、曰聚童紳及游手無賴數輩、從事其間。其出入勤惰、殆不容詰。茲民挾鋸數千而入、即更定戶稅、如反掌。幸而事露、欲誰何之、則左右指曰、彼負吾庸、吾以酬若庸也。噤不敢復問。若是、而欲吾職之修、可不謂難歟。余聞而悲之（文集卷二〇、二一葉、金壇簿廳壁記）。

地方政府は時に常軌を逸するような行動をとった。たとえば、運河の近くには「函管」と呼ばれる、水利用の木製の管があった。管の外側は石で保護されていたが、地方官はこの木石をとり去って自己の用に供したのである。

函管由來幾百年 大者用錢且十萬

.....

.....

只今掘盡誰敢計 但恐民田從此廢

豐年餘水注江湖 涓滴不爲農畝利

有時驟雨浸民田 水不通流禾盡死

.....

.....

盡驅丁壯折函管 更運木石歸城闔

呂城一百二十里 不知被擾凡幾人

（文集卷四、一七葉、運河行）

彼は地方政府において、廉平の人が少いこと、またたとえ良吏がいても実際には何もできず、農村は擾害を被ることを目睹しよく理解していた。劉宰にできることは、従って郷紳の立場から、その力の及ぶ範囲内で、いくらかの支援を人民に與えるというだけだった。

次に劉宰が官を辭してから、どんな士大夫と交友關係を持ったかを調べよう。彼と書信を往復した人の中には、倪思、

葉適、杜範をはじめ、史學で有名な李心傳も含まれるが、ここでは、眞德秀、魏了翁との關係を述べて全體をうかがってもらうことにする。

眞德秀との交わりは早年に始まっている。德秀が江東轉運使として建康にやって來た時、宰は詩を贈って愛民眞學士と稱賛している。德秀の『救荒曆』の題跋は宰の筆になり、また忠宣堂や先賢堂の記文を書く依頼も彼から受けた。一方、劉宰は父の墓誌銘を撰してくれるよう眞德秀にたのんでいる。一二五年、理宗の登極とともに、眞德秀は侍郎に任ぜられたが受けず、外任を願ひ出た。宰はこの時、考えを改めるよう書を送り、五年ののち、德秀が再び侍郎に任命された際には、諸葛亮、張浚らの事例をひいて激勵した。一二三四年、德秀が參知政事にのぼると、賀啓を送り、まもなく、彼が病没すると「眞西山贊」を書き記した。

魏了翁とは一二〇六年、眞德秀の宴席で出會っている。當時は、葉適（水心）の經世の學が人々にもてはやされ、また楊簡（慈湖）が陸九淵の學を提唱していた。劉宰は魏にあてた書簡の中で、

水心之論、既未免誤學者於有。慈湖之論、未免誘學者於無（文集卷一〇、一一葉、通鶴山魏侍郎）。

と述べ、魏が思想界を指導するよう希望した。ここでもうかがえるように、劉宰は實際にこうした人たちと顔をあわせ、機會は少なかったが、書信によって繼續して氣脈を通じていたと考えられる。このほか、趙師魯や史彌遠の外甥沈祕讀らとも文通があり、隱棲といっても士大夫社會と全く没交渉ではなかったことが判る。

中央の有力者のほかに地方官との關係を一瞥しておこう。『京口耆舊傳』では

門……雖設常關、鄉曲親朋、剝啄得通。郡官行縣求見、有齧牆而後得入者。縣官非數四至、不得見。非數四見、不往報謁。其報謁也、不乘車、不具門狀。惟一僕具持刺曰、邑民劉某拜見（卷九）。

とあるが、やや誇張の嫌いがある。病氣と權要を喜ばぬところから、人と會うことが少なかったとはいえ、歴代の鎮江府、金壇縣の長官たちに對しては、きちんと賀啓や謝函を送り、現任者に代って割子をも書いた。そうした機會を借りて、彼は

水利その他の郷里の福祉について役所側と話しあった。ところで、劉宰と權門史氏とのかかわり方は當時の状況を反映して複雑な色合いを帯びている。史浩の子弟⁽⁹⁾たちは聲望、勢力とも大きかったが、とりわけ大權を握る史彌遠に劉宰は好感を持てなかった。ただその子の一人史宅⁽¹⁰⁾と劉宰は同年の進士という誼があった。恐らくその關係で知鎮江府の史彌堅は劉宰を招いて地方志編纂を手傳わせ、また賑濟局に加えようとしたのであろう。さらに史彌堅は進士たちを招いて鹿鳴宴を張り、專使を派遣して劉宰を招聘しようとしたが、彼は病氣にかこつけて出向かなかった⁽¹¹⁾。宰が沈祕讀に與えた書中では、

先令舅（史彌堅）典鄉郡時、猶不得一造郡齋（文集卷二、三葉）。

と述べる通りである。このほか、深水知縣の史彌革や鎮江通判の史時之などとも手紙をやりとりしており、通觀すれば、劉宰の進士出身という身分と、こうした士大夫、地方官との交渉が、彼の郷紳という名位を形成する中心的要素だった。そして努力して善學に勵んだことが次の要素となる。またたびたび推挽を受けても官につかず、館職と宮觀の祠祿を與えられたことも、郷紳の名位を高めるにあずかって力があつた。

餘談にわたるが、上述したように一二二年、彼は「孝功曆（印紙）」に以後他人の保舉も行なわず、自身も出仕の意圖が眞實ないことを書いて提出したことに言及しておきたい。このことは文集卷二十四、一葉の「書印紙後」と同卷十八「書所題印紙語」に見えるが、興味深い記事なので前者を引用しておく。

余性疏拙。初注官時、鋪吏授一卷書、曰謹視之、是吏部印紙。仕之久速、官之功過、將於是乎考。余曰唯。既棄官、始不加愛重、士之始仕與仕而再謁選者、須保官。人憚保官之批印紙、多靳不與。以余之獨狗視之也、因借去。自相郵以爲保。或累月不歸、或迷不知所在。友人……以余爲非。且言、萬有一不實、謗曰不知。可乎。余是其言、因索歸、書卷尾、以謝來者。

この種の行爲は人の尊敬を受ける筈だが、はじめは誰にも知られず、一二三四年、王遂ら友人數人が劉宰を推薦してはじめて評判となった。簡譜でも述べたように、彼は孝功曆を使わず、きちんと年資計算をしていなかったのも、政府では

特に、盡還磨勘歲月、使轉官という處置をとったわけであった。これによって彼の郷紳としての名聲は更に高まったと言
い條、既に年七十の彼にとつて、實際の影響はなかったであらう。

第四章 學術と思想

郷紳の名聲と地位は學術そのものからは生まれない。しかし、科擧などをへて、郷紳の列に加わつておれば、學術上の
造詣は名望を増す一助となる。劉宰の場合もこれにあてはまる。當時の状況の中で、彼の學術上の位置がどの程度のもの
であつたのだろうか。文集の序では一様にそれに觸れるが、どれも通り一遍の書き方にすぎない。明の王集は、劉宰が、
常以不及登朱子之門爲恨といい、明の范甯は、宰がかつて黃榦（勉齋）と交游したことを述べ、清の馮煦ははつきりと、
爲朱子再傳弟子と書いてゐる。范序は『至順鎮江志』卷十八の王遂が、劉宰とともに黃直卿（黃榦）と游んだという記事
に依據してゐるようだが、至順志の原史料は不明で、黃榦は黃度の誤まりという可能性もある。⁽⁴⁾ いずれにしても、劉宰は
某帥角侍先君、筆耕以糊口とか、某少迫於貧、不克裹糧、從四方宗匠游とか、さらには、

吾鄉之楊氏張氏、皆傾家貲以來當世士。凡士之有聲場屋者、雖在數千里外、必羅致館下。使與諸子及鄉之後進游。……

張氏……諱損字德久……號省齋先生。余時往來郡校、或爲貧假館、不克在弟子之列。亦時々登門、竊聽議論之餘（文集卷
三二、六葉、張宣教墓誌銘）。

とあるように、正式な學統というものはなかったようである。彼が理學に接近したのは進士に擧げられ陶氏と結婚した
頃で、陶家の家庭教師林復之との交わりが原因と思われる。宰は林を由是得師焉と尊敬している。林は、かつて潭州教授
となり、命舟浮湘、過嶽麓書院、邂逅張之風。⁽⁵⁾ といわれるものの、その思想内容は良く判らない。従つて『宋元學案補
遺』卷七十一に於て、劉宰を嶽麓諸儒學案に加えてゐるのはいくらから理由はあつたにせよ、當の劉宰は嶽麓はもちろん、他
のどの學派にも自分が屬するとは思つていなかったであらう。⁽⁶⁾ のちになると、彼は、

天下學者、自張（栻）朱（熹）呂（祖謙）三先生之亡、偃々然無所歸（文集卷二〇、一二葉、通鶴山魏侍郎）。

であることを嘆じ、魏了翁が思想界を主導するよう望んだ。彼が、葉水心や楊慈湖に賛成しなかったことはすでに觸れたが、かといって、自ら道學・道統を稱揚したわけではない。

さて、一二二五年、理宗即位後まもなく、朝廷は道學を尊崇しはじめた。當時國勢は憂慮すべき状態にあり、外敵に對抗し、國民のプライドを増すために、道統を作りあげ、文化の正統と所在を示す必要があった。劉宰の文章に道統の文字があらわれるのもこの頃からである。彼は朱熹を稱揚した中で、四書集道之大成、合諸家之說擇焉。……貫道統攸係と述べ（文集卷二三、五葉、紹興尹朱二先生祠堂記）、また鄭清之への書信では、惟大丞相以講學輔主、上續道統之傳（文集卷七、七葉）と書いている。劉宰は朱子學をもって學統とすることに異議はなかったが、陸九淵や袁變らを輕視したわけでもない。ある時は『朱子語類』を人に贈り、のちには『近思錄』を喜んで、尤切於學者日用。頃得數本、皆轉授學者（文集卷六、一八葉）という程であった。しかし一方では、

朱氏書年來盛行。今立要津者、多自謂常登先生之門、承先生之教。而趨鄉舛差、尙多有之（卷六、一八葉、回湯德遠）。

と嘆じてもいる。『宋元學案補遺』では、彼に雖博考訓註、而自得之爲貴との評價を與える。前半はともかく、後半は事實に近く、彼の長所は實行にあり、理論は重んずるところでなかった。

なお文集中に見える彼の詩は一級品とはいえない。『宋詩鈔』にられる『漫塘詩鈔』冒頭の編者の評は、常調で五言古詩がやや優れるというにすぎない。結局のところ、劉宰は學術の上でとりたてて重要な貢獻をしたわけではなかったが、郷里で尊敬を受けるには十分であった。實踐を重視する彼にあっては學術は二の次といえよう。

最後に儒・佛・道とのかかわり、換言すれば彼の信仰に目を向けたい。儒家には、獨特の宗教的信仰と祭祀がある。劉宰もそれには積極的に參加した。たとえば、一二一六年、金壇が旱災に見舞われ、靈濟廟で雨乞いが行なわれた時には、重修されたこの廟のために記文を書き（文集卷二一、四葉）、さらには梁夫人との縁で江西新淦縣の社壇記を撰した。そこ

では努めて佛老を斥け、かつまた、民間で龍を祭って雨を乞うことに反對した。神は當地の社壇においてのみ祭るべしというのが彼の主張である。儒家でいう神は經史に記載する範圍に限られ、民間で信仰される淫祀と區別される。實際には民間には無闇矢鱈に信仰があり、多すぎるくらいだが、劉宰はそれを排除しようと試みた。たとえば、吳季子が國を讓った高節を紀念する嘉賢廟で、吳の墓碑と碑亭が損壞しているのを見て、廟の重修を發起した。彼の撰した記文には歐陽脩の『本論』の當修其本、以勝之。が引用されているところを見ても、儒家的信仰を確立してこそ、民間淫祀が打破できるという考えがうかがえる。この嘉賢廟の庶間にあつた數多くの偶像を彼は破壊したが、その數は八十四にのぼったと言える。彼が佛老を斥けた理由は、

自釋氏之徒入中國、與老氏之徒相比、誑惑愚民、至謂喪祭非我不可（文集卷三〇、四葉、故澹軒先生墓誌銘）。

とあるように、それが儒教の祖先崇拜を侵害した點にある。とりわけ佛教は、吳人迷於佛として彼の嫌うところで、佛教を崇信していた妻梁氏から、その信仰をとりあげてさえている。

梁氏故奉佛。君之來、猶私以像設自隨、時若有所諷誦。余既與論釋老之害道、及鬼神之實理、恍然若有悟。自是遂絕（卷三十一、一三葉）。

周知のように、宋儒の中で佛教反對を貫き徹した者は極めて少い。劉宰としてその例外ではなかった。彼は自らは、儒家者流をもつて任じ、口に釋氏の書を讀まぬと稱しても、頼まれれば、佛寺の記文を書き、あるいは「東禪百韻」の詩も作った。ただその記文中では、三綱五常や儒家道徳を強調することを忘れなかった。このほか、劉宰が行つた賑濟の事業にも僧侶・道士が關係している。丹徒から金壇に移つた宰の父親は祖先と別の場所に葬られた。その近くに茅舎だけの廢寺があり、曾鞏・曾布の後裔で吏部尚書の曾喚の家から援助を受けていることを知って、自らも資を捐し重建をなしとげた。この龍泉布金寺の僧祖傳は劉宰の最初の賑飢の中心となつて働き、祖傳を繼いだ僧慧鑑は一二二四年の第二回目の賑飢を監督した。郷紳と寺僧の友誼關係の一端をここにかがうことができる。

道教に對する劉宰の態度も大體同じことで、道士に詩を贈ることは勿論、丹陽縣の大霄觀に對して記文を書き、あるいは莊子を好み、國朝四君子（司馬光・歐陽脩・王安石・曾鞏）の文を南華經と易えたこともあった。彼がこのように道佛に完全に反對しきれなかった理由の一つは、それが社會的善行を爲す點にあり、彼自身の恵みを郷里に及ぼす精神と矛盾しなかった點にあるだろう。

第五章 郷紳としての活動

劉宰の郷里に於ける活動は多方面に及び、『京口耆舊傳』などの簡単な敘述を遙に上回るものであった。この章では賑濟を除くその幾つかを明らかにしたい。

宋儒はあれこれと福祉事業を行なったが、その最も著名なものは范仲淹が始めた宗族の義莊と、朱熹とともに名高い郷村（社區）の社倉、就中後者である。

義莊は范に倣って吳中の士大夫が設けてはいたが、必積年而成ものであり、金壇の張氏のそれを見て劉宰は、義莊、世所難と嘆息を洩らしている。⁽⁹¹⁾祖父の時代に金壇に移住し、上にも述べたような家庭の環境では、彼が義莊を經營するわけにはいかなかったろう。それよりも彼は社倉に強い關係を寄せた。儒家の信仰の場である社稷壇を重視し、金壇縣の社稷壇を彼自身の錢物を捐して修理させたもの、⁽⁹²⁾社壇が社倉と結びついていたからでもある。江西新淦の社壇記のところでは、與邑之好事者、謀儲粟千斛於兩廡、爲平糴倉、以權市估之高下。……且因社而有倉、故助米者、皆列名碑陰（卷二三、三葉）。

とある。ところで、社倉の運營方法はまちまちであつた。

社倉之制、防於隋、詳於近世朱文公之奏。……今社倉落落布天下、皆本於文公。……其本或出於官、或出於家、或出於衆、其事已不同、或及一郷、或及於一邑。或糴而不貸、或貸而不糴。吾邑貸於郷、糴於市、其事亦各異（文集卷二二、

南康胡氏社會記。

はつきりした年代は判らぬが、彼は常平使者と懇談して、里中に社會を創設させた。そして、たえず社會の運用方法などを研究していたようで、友人の胡泳（伯量）——彼は朱熹に學んでいる——が南康からやつて來た時も、種々教を乞うている。胡は運營方法は地方の性格によって一定でないが、肝心な點は運營する人にあるとして、自分たちの經驗を次のように述べた。

所當知者、體統欲一、責任欲分。……責任不分、則意向偏曲。……今吾里之事、所以行之久而無弊者、其始會吾家積歲之贏、得穀六百斛以貸。蓋吾兄弟合謀爲文。……故其體統歸一。越二十年、迄於今、合本息二千斛。……吾兄弟出處不齊、而吾兄弟之子若孫、有時不能書勝其責也。故各以其地之所比、而屬諸其人。使散之、必按其責、而多寡不得私歛之（文集卷二、九葉）。

胡氏の社會は個人管理ともいふべきもので、劉宰はこの方法に疑問を持った。彼自身、社會運營の最良の術を提示はできなかったが、その現狀と前途には決して樂觀してはいなかった。

狡者欺之、頑者負之、強者奪之、吏之無識者、侵漁之。社會欲存。得乎（文集卷二、一〇葉）。彼が創設した社會はしかし、まずまず繼續して管理運用され、相應の成績をおさめたようだが、うまく行けば行つたで、貪婪な官僚たちからクレームをつけられた。

郷村の福利と直接つながるものとして別に義役莊があつた。彼の時代においても役法は農民にとって苛酷な負擔で、見當役者、不勝箠楚、沿道呻吟。其未役者、前期百方以求苟免。餘則畏懼蹙縮、至不敢名其先人之丘墓（文集卷二、二〇葉）。

という有様だった。さればこそ、數十年來、各地で義役が推行され、負擔の均等化がはかられたのだが、その方法もまたさまざまだった。劉宰の郷里の義役とて、各戸にわりあてて援助する建前とはいへ、

吾邑計產入田、或計田入租、或計租入錢、而人心不齊、率一二歲、輒不承於初。

のように問題が生じがちで、とりわけ、財産高に基き、田を提供する入田を人々は好まなかった。そこで彼は、

余俾入田者、立典賣契要、歲收租爲永業。入田者、視田之直、歲出貸收息。以租若息、爲役之庸、而儲其贏。其始若甚難、而久甚裕（文集卷二二、二〇葉、遊仙鄉二十一都義役莊記）。

と所有權をそのままにして抵當にいれさせ、利息を與え、残りを役戸の費用とするように試みた。この義役田は彼の努力によって次第に擴張されて行った。

越一年（二二四年）早、頗容備直。曾有以傍都下田、求售於余者。余命之莊、評其直三百九十五緡有奇。質劑已具、而田主有訟、官沒入之。時今右司郎中王君暨、實宰吾邑。幸是都義役之成、以所沒田爲助。余謂田雖官給、而經始有費、不可不酬。且已評之直、不可虛也。衆不慊余不爲回。未幾田之沒於官者皆復。惟此以酬直不與（文集卷二二、二一葉）。

こうした義役莊の管理は難事であることを彼とて十分承知していたが、ほかに良い制度がみあたらぬ以上、家族道徳を強調して、祖先の作った義役田を繼承させるほかなかった。

このほか、『京口耆舊傳』で橋梁・道路の工事に資金を援助したことが書きとめられている。『至順鎮江志』によれば、彼の修建した橋は五ヶ所と記録され、うち二ヶ所は運河を跨ぐ大橋で、すべて劉宰が唱導し、あるいは衆を率いて建造したものだ。また彼はあまり政府とのかかわりを持ちながらなかったとはいえ、晩年には、地方官に對して、いわゆる州縣額外の附加徴收の問題を論じ、不法を除くためすめの公正化を申しいらもしている。

最後に彼と醫療衛生について若干ふれておきたい。恐らく重い皮膚病のため醫者と交渉が深かったと想像されるが、彼は神がかりの祈禱を信ぜず、醫療衛生を重視していた。文集には醫者や醫僧についての記事が散見している。彼が聲を大にして醫藥常識と公共衛生の普及を提唱したことは、たいへん現代の狀況と似ている。民間信仰によって疾病を治療しようとする風潮に對して、

淫祠繁興。其一日祭瘟、所在市廛、皆有廟貌。……其次曰齋聖、又其次曰樂神。晝夜留連、男女混雜。冥頑之童、附而爲鬼。鬼固不靈。腥臊之巫、降而爲神、神亦可恥。……牲十餘、不供一夕之須。……其它誘取脅取、不使聞知。……或典質、……或假貸、……以致資產破蕩、老稚流離。深原其情、有甚于盜（至順鎮江志卷三、尊天敬神文）。と批判している。迷信淫祀に反對するのは儒家としての見識からだけではなく、醫藥を重んじない弊害を正しく把えていたためでもあった。

第六章 劉宰と賑飢

この章では、劉宰と最も關係の深かった賑飢活動の内容と經緯を眺めることにしたい。簡譜でも言及したように、彼は辭官後三回にわたって私的にこの事業を行っている。まず一二〇九年、他の郷紳たちとともに、飢饉のため遺棄された兒童救済のために民間粥局を開いた。文集卷二十に載せる「嘉定己巳金壇粥局記」から少し引用しよう。

邑士張君汝永、侯君琦、語某及新桐州湯使君。……相與謀、糾合同志。用大觀洮湖陳氏、及紹興張君之祖八行故事、爲粥以食餓者。而存飢之餘、中產以上、皆掣肘於公私。雖僅有倡者、亦寡於和。既力弗裕、則惟欲收養孩穉之遺棄者。凡老者疾者、與孩穉之不能去母者、雖甚不忍、皆謝未遑。

八行故事とは徽宗時代、蔡京が制定した法をいう。幸いまでもなく、浙西常平使の口ききで各方面から援助の手がさしべられた。

比常平使者符下。而旁郡旁邑亦有喜爲助者。乃克次第收前之遺、而併食之。……會有以其事、白郡太守。守給米三百石。郡博士勇於義者、亦推養士之餘、贍之。而用以不乏。

原文ではこれに續き、粥局の詳細な描寫にうつる。

事始於其年十月朔、而後於明年三月晦。經始之日、孩穉數不盈十。後以漸增、閱月登三百。乃十有二月、合老者疾者婦

人之襁負者、踰千人。比月末倍之。間歲、少壯者咸集、則又倍之。間以陰晴異候、增損不齊。其極也、日不過四千。槩以大觀所紀成數、僅增五之一。

このように多くの食を求めて集まる人を具體的にどのように扱ったのだろうか。

始置局於縣之東偏廣仁廢巷、中於嶽祠、終于慈雲寺、爲其隘也。就食者、先穉、次婦人、後男子、俾先後以時、出入相待、爲其擁也。孩穉之居養者、朝暮給食。非居養而來者、日不再給、爲其難於繼也。

次に費用をはじめとした數字があがっている。

最凡用之數、米以石、凡九百六十有二。錢以綱、凡二千二十有二、而用糶米者過半。薪以束大者三千九百、小者一萬四千二百。葦席以藉地。障風雨、及葬不幸死者、凡三千四百。食器三百、循環給食。中間隨失隨補、凡一千三百九十。皆有奇。草薦紙衾與花費、瑣々不載。

ところで、賑濟を實際にとりしきつたのは劉宰たち郷紳というよりも、先にも觸れたように、寺僧や道士たちであった。

掌其事、布金寺主僧祖傳・茅山道民石之朴。石以私計歸。祖傳實始終之。左右之者、張君昂・徐君椿。而主張經畫、入寺之初則鄧君允文也。

功勞をたてても、自己の功とせぬのが儒家の美德であり、郷紳の立場としては、事業の成功はすべて地方官に歸すべきであった。この長文も、

是舉也、微常平使者、無以成其始。微郡太守郡博士、無以成其終。故疏其凡有助者於石、而於三者、加詳焉。使來者有考。

と結んでいる。

このち六年をへて、鎮江の知府となった史彌堅は、劉宰に府の行なう賑濟局を擔當するよう要請したが、彼は病氣を

理由に斷わり、自らの経過をもとにした『荒政編』をさし出したにとどまった。¹⁰⁰⁾ 一二二四年に開かれた役の第二回目の粥局は次のようなものであった。

是歲（一二二三）也暴不勝寒、穀入大減、菜亦不熟。越明年春、啼飢春載道。……二三醫生過門、始爲宰言之。宰念先君……坐所薄田、歲豐收穀可百斛。輸官給守者之餘、不在半。……因與醫生謀、載以歸。……卽嶽祠空廡、春而糜之、以與飢者。共其始來者、纔數百、……可無之事。……盡三月、乃盈萬人。宰始窘於無繼、議所以止（文集卷二、六葉、甲申粥局記）。

この時の賑飢は、最初は劉宰個人の義捐で行なわれたが、やがて友人の趙若珪が協力の手をさしのべ、かくて、乃四月朔、……增竈……増員。……又所用米皆精鑿。自平時中下之家不能有、乃今以食飢者。以是遠近流傳、來者至萬有五千。……必舉首仰天、三扣齒而後敢食。迄十有五日、大麥實乃已。¹⁰¹⁾

というこうした形の賑濟としては史上最大の規模に達するに至った。ところで、この記文の末尾には、この事業に参加した五十一名の人たちの地位と氏名、そして義捐額が書き残されている。まずここに登場する人物は次のように分類できる。金壇知縣及び句容などの官員三、郷人で他所で官職についている者四、退職官および子孫のおかげで名を出している者十、郷貢進士四、國學進士一、國學待補生九、宗室の玉牒官二、府學學諭一、邑人十五、僧侶一、道士一。碑記では、各人の下に官會（紙幣）、米穀の醸出額が詳しく刻まれているが、煩雜なのでその一部をあげるにとどめたい。金壇知縣は官會五十阡と米十五石、句容縣尉は米を僅か二石七斗、知縣の職をしりぞいて郷里にあり、劉宰を積極的に援助した趙若珪は米四十三石、進士たちの中で最高は米二十八石だが平均すると約五石、邑人たちの中では最高は米十四石を三人が出し、中には柴一千束という者もいた。なお僧侶は米十一石七斗、道士は六石九斗を出している。さて官會の合計額は六十四萬六千に達し、雜支出をまかなくなった餘りで八十三石の米が買われている。雜支は器物の代金と人件費であろう。ここからも紙幣價值の下落と米價の高騰がうかがえる。義捐米額は合計四百九十一石で買入れた八十三石を加算して五百七十四

石となる。飢民が毎日どれくらいの食糧で生きていたかを直接に語る記事は碑文にはないが、至順鎮江志卷二十の元の天曆己巳（一二三九）の例によると、各人一日半斤を食して残喘を延したとある。半斤は一石の〇・五%で、とりあえずこれで計算すると、一萬人で毎月五十石の米が要る。従って五百七十四石ではたかだか十日程度まかなえるにすぎない。間もなく新麥が稔り、それ以上の救済が必要でなくなったのは幸いだった。

一二二八年の第三回目の私的粥局は、隣縣が大雨で被害を受けたため、救済にのり出したもので、王遂や知府の援助を仰ぐこともできた。

舊歲夏秋積滂。吾邑幸半熟、已而旁郡滂甚。……祠宇之在吾邑者、廣深足以容衆。乃用甲申故事。……始二月丁卯、期

以既月止。既月而民未食麥。邑之士大夫……王遂……王文虎等、復合衆力以續。又郡太守馮侯、特捐百斛以助。迄四月丙午乃止（文集卷二七、一三葉、戊子粥局謝獄祠祝文）。

この経過は、それまでのケースと同様、劉宰が獨力で先鞭をつけ、そのあと士大夫、郷紳が援助して成功させたものであった。

こうして、郷里のために盡力した劉宰の名はあがり、また郷里の人たちから尊敬と感謝を受けたことは、先にあげた役の葬儀の時の情景や、鎮江の先賢祠、金壇の先賢祠に祀られた事實などから推測されよう。

むすびにかえて——社團の發展を阻碍した南宋儒家の階級制

本稿の意圖は、劉宰を賞揚することではなく、歴史的評價を與え、彼を通して、その背後にある問題を考えようとするところにある。彼に代表される南宋の郷紳・儒家たちが、なぜ社區の公共事業という枠を破って社會的團體を發展させ得なかったかという問題がそれに他ならない。こういうと、たかが一つ二つの個別事例でそうした大問題に結論は出せない。もっと個別研究をつんで歸納的結論を導くべきだと言われるかもしれない。しかし、ある假説をたてていないと、個別事

例がいかに多くとも、優れた結果は期待しにくい。歴史研究も自然科学と同じように、假説をたて、實驗によってそれをたしかめ、さらに修正を加えて深く廣く研究を推し進めてゆかねばならない。こうした假説、考え方を私は申論と呼ぶ。それは結論に至るまでの必須の前提であり、また手續でもあると考える。劉宰の事蹟と社團形成が行なわれなかったかという二つのことがらの間を、私は個性、思想、制度ならびにその關連の中で申論してみたい。

現代のある學者がやるように、心理學の分析方法を使って、諄々人を傾聴させるようなことを私はいうつもりはない。ただごく常識的な立場から劉宰の性格をまずおさえておこう。彼はたしかに身邊をきれいに、名聲を好む傾向が強かった。官界に入つて志を立ててからは、あらゆる上官の推薦を拒否している。こうした推薦は本來良い加減なものが多かったと言ひ條、一概に拒絶するほどの必要もまたない。自斑病は彼の行動を消極的にはしたであろうが、といつても、特定の士大夫や官僚との交わりは絶たなかったのだから、病氣そのものよりも體面が重視されたのだと思われる。劉宰は、自らを病んだ鶴に譬え、詩文中でもしばしば孤獨の感懷を吐出している。學術に對する態度、官を辭したあとの生活、官觀の俸祿の拒絶、そして賑濟と、恐らく彼は自分の行動によって心理的な満足を得たであろうが、その性格はやはり偏向で自己中心のものであった。こうした性格は粥局の運営にも反映している。いつもまず獨力で行なおうとし、自己の財源が涸渇すると別に方法を按出するよりも、まず閉鎖を考えた。彼には何故、人と合辨し、適當な人と合作しようという開放的な氣風がなかったのだろうか。ところで、このような共同、集團方式を好まぬ氣風は、單に劉宰一人だけの特例ではない。鄉紳的な士大夫たちは、支配階級に屬しているという優越感を持ち、官府や他の機構の束縛を受けることを嫌った。彼らは一面で剛直だったが一面孤立的でもあった。だから自分から、團體を設立したり、それを改良進展させる關心も能力も持たなかった。

彼らの性向は、當時の思想様式と無關係ではない。周知のように當時の主流をなしていた道學は修身に偏重し、自悟、自覺、自發の言行を求めることを理想とした。つまり内に向くことに重點が置かれていた。むしろ道學とて儒學の傳統を

沿襲する以上、外向の倫理經世を放棄しているというわけでは決してないが、合わせてみると、「重人」つまりまず自己本人を重んじると言える。自己から推して人に及び、外向きの場合重點を人と人の関係におく。「重人」であるから、團體を考えたとしても人の方に重きが置かれ、團體そのものを一個の纏った單位とは考えず、また重視もしない。明代の思想家のある人たちは、理學の修身から、近代西洋風の一種の個人主義を發展させたと指摘する學者がいる。だが私はこうした考えに疑問を持つ。中國思想と西洋思想が、その一部分に符合する所があるのはむしろ當然だが、その部分的符合させいぜい個人主義となる萌芽程度にすぎず、それも偶然符合しているだけで、基本線は決して同じではない。明の少數の思想家として「重人」の枠を突破してはおらず、社團の重要性に気づかなかつた。

南宋の理學者たちは、王安石が制度、法律、機構を偏重し、それによって失敗したと批評する。役らは改革進歩の鍵は人にあり、好い人物がおれば好い結果が生まれると深く信じていた。つまるところ、劉宰型の人物がいれば社區を救済でき、そうした手本を示せば、後生に義俠心をふるいおこさせ、社區の福利に責任を負わせることができるというわけである。制度は常に完全たりがたく、おまけに弊害の多いものだった。頼るべき唯一の道は、不斷の教育によって世情人心を向上させることであつた。宋儒の思想様式では、制度は、身―家―國、つまり修身、齊家、治國という連りで考えられ、家族以外の社團など殆んど考慮の外が存在であつた。宋代社會に變化が生じ、産業、科學技術、貿易は進展し、城市鄉鎮はすべて發達し、中下層階級は生長した。だが南宋の理學は、中下層の生長を反映しようとはせず、身―家―國の連りを堅く規定するのみで、身―家―社團―國と改めるようなことは全然行なわなかつたのである。この儒家の制度中に一貫してみられる缺陷、有力な社團の缺失という問題については、宋から清初に至る大思想家たちの誰一人として改變を思いついてはいない。

他方、君主と政府が統治權を獨占している體制に於いては、社團組織がそのいかなる一部分でも分與にあずかることは容認されるところではない。支配者たちは、社團の勢力を利用して、自分たちに反抗する人物が出現することを恐れた。

地方の官員たちは、やむを得ない場合以外、郷紳が社區を指導し援助することに賛成しなかった。劉宰が飢民を救つても、地方官は決して本心からは彼に感謝しなかったし、鎮江の兵變で彼が社區の安全に協力したのも、臨時特別の處置にすぎなかった。事がすぎると、地方官は郷紳がいかなる社區・社團の福利を主導的に行なうことを認めなかった。

郷紳の側からみても、彼らは官の肩書を持ち、支配階級に属している。時に政府のやるべき賑濟を肩代りして行い、また政府に對して不満があつても務めて摩擦を避け、公然たる批判はやらない。彼らは名望はあるが、權力はなかった。彼らは常に統治階級の立場にたつて幾分か社區の福利を顧慮するにとどまり、社團を擁護して、その福利をかちとることは決してできなかった。(一)劉宰のような性格は、支配階級中の不滿分子に常に見られる。(二)南宋儒家の階級性は強く社團の發展を束縛した。(三)彼らの思想様式が中下層の生長を反映しない以上、制度中の若干の弊害は批判しても、社會制度の改變は考えなかった。この性格、思想、制度の三つの要素が絡みあつて、社團の發展を阻碍したのではないかというのが私の申論である。

註

- (1) 宮崎市定氏はかつて明末の郷紳を論じられた。(「張溥とその時代」『東洋史研究』三三—三三、三三三—三六九頁)。「補」我が國に於ては近年とみに明清の郷紳研究が活潑で、それと銘打った專著も出ていることは周知の通りである。劉氏が必ずしも現在の日本の學界の成果を十分ふまえておられるとは言えないことは豫め御了承いただきたい。
- (2) この方法は、現代の社會科學と似たところがある。拙著、*Some Classifications of Bureaucrats in Chinese History-graphy. Confucianism in Action*, 1959, pp. 165—181, 參照。
- (3) Denis Twitchett, *Problems of Chinese Biography. Confucian Personalities*, 1962, pp. 24—39.
- (4) 他に『南宋書』卷四六にも傳があるが、ここではとりあげない。なお『宋史翼』には彼の傳を載せていない。
- (5) 崔與之……劉宰……端平初、並膺天子優寵、一歲數遷。……終不能羅而致之。
- (6) 在諫垣則多彈擊、在講幄則多獻替。
- (7) Etienne Balazes, *History as a Guide to Bureaucratic Practice. Chinese Civilization and Bureaucracy*, 1964, pp. 129—49.
- (8) 屢召不起、則毅然……恤窮飢、撫存沒爲心。

- (9) 而所以加惠於鄉邦者、尤盛。
- (10) 『漫塘文集』は『嘉業堂叢書』一六二―七一冊におさめられている。王遂の序には略計平生之文、十未四五。其子：龔次之、名曰前集。而留後集、以待方來。と記される。また明代の各序跋は、當時、文集の前集が残存するだけで、語錄十卷は既に失われていたと言う。最も惜しいことは、劉宰の歿後、王遂によって撰された行狀が載録されておらぬ點である。文集の附録には『宋史』本傳を抄録し、約二百字の考異をつけ、また『癸辛雜識』から一則、敕命一道、祭文三篇を加えているが、傳記的價值は少い。
- (11) 卷八、三―四葉。
- (12) 嘉定志卷一五、至順志卷一七。劉宰の號を咸淳の序文では漫堂に誤っている。
- (13) 粵雅堂叢書第二十集の『京口耆舊傳』では卷九の九―一四葉にあたる。
- (14) ここでいう傳はすべて『京口耆舊傳』を指す。按語は必要最少限にとどめ、主要な問題點はのちの各章で詳論することにした。
- (15) 文集卷三三、一一葉、陳府君行述。
- (16) 文集卷二九、一一―三葉、朱晦顔の墓誌銘を参照。また卷二一〇葉の懷友詩の序句では、江寧より離任してのち、離羣索居したとある。
- (17) 續資治通鑑(標點本、以下同じ)卷一三四、四一五二頁。拙著『How did a Neo-Confucian School become the State Orthodoxy? *Philosophy East and West*, Vol. 23 No. 4, 1973, p. 500.
- (18) 文集卷一四、七葉、謝韓漣挺舉練達科。
- (19) 文集卷一四、七―一葉。
- (20) 文集卷三二、二六葉の「皇考雲茅居士朝奉壙銘」では、彼の父は嘉泰癸亥(三年、一二〇三)になくなったという。
- (21) 文集卷一六、一葉には上郡侍郎友龍啓がみえる。薛叔似に送った書簡は文集中には見當らないが、この頃兵部尙書の地位にいた。
- (22) 註(切)の拙論四八三―五〇四頁参照。また、*Encyclopedia Britannica*, 15th. ed., 1974, Vol. 4, pp. 337—340. ♀ 参看。
- (23) 文集卷三二の梁氏墓誌銘に、及奉旨堂審、將以疾辭とある。また卷六、一六葉、回趙御幹に據ると、二月には祠祿を得て郷里に歸り四月に堂審の命が降り、翌一二〇九年にも堂審の命があったことが判る。しかし彼は、以賤疾形於面目、不可復出と断わった。
- (24) 文集卷八、二葉、通知鎮江傳侍郎。なお祠祿の給與を受取らなかったことは、文集卷五、七葉、辭免除直寶護閣宮觀第一狀の向叨祠命、已愧罔功、並不敢支請俸給による。
- (25) 文集卷二〇、一三葉、嘉定己巳金壇粥局記。賑濟については第六章参照。
- (26) 文集卷八、四葉、回知鎮江史侍郎三。
- (27) 文集卷三二、一一葉、梁氏墓誌。
- (28) 文集卷二四、一葉と八葉。これについては後章にのべる。
- (29) 文集卷二二、六葉及び江蘇金石志卷一五。これも第六章で詳述する。

- (30) 續資治通鑑卷二六二、四四二四〇二八頁。
 (31) 文集卷一四、一六葉、特旨改秩謝史丞相。
 (32) 文集卷二七、一三葉。これも後章で詳しく觸れる。
 (33) 續資治通鑑卷一六七、四五五〇一頁及び四五六七頁。杜範『杜清獻公集』卷五などを參看。
 (34) 文集卷五、九〇一二葉。その一つ辭免除太常丞第二狀をみると、皮膚爲風毒所乘、得疾白駁、雖無瘡疥、亦無痛楚、而風毒浸淫、自頭面達於四體、強半變白。形容之惡、見者駭異と記されている。
 (35) 文集卷五、一三葉以下。
 (36) 續資治通鑑卷一六八、四五七九頁。
 (37) 至順鎮江志卷一一、五及び二六葉。これについては第六章でもふれる。
 (38) なお金壇は丹陽にくらべて偏鄙なところだ『至順鎮江志』卷一三、三三葉では僻路不置驛といっている。
 (39) 文集卷三二、二五葉、先祖十九府君墓誌。會姻家湯氏爲子擇師、得名士上饒王君、須錢三千緡起家。湯氏聚族而謀、僅得六之五。先祖時在座。作而曰、願奉五百緡、以幸教吾子。衆皆愕、謂力不讎。退卽鬻常產。五百緡先衆而具。
 (40) 京口耆舊傳卷九、劉蒙慶傳。
 (41) 文集卷三二、四葉では我先君雲茅居士、授徒於金壇之河下といひ、また同卷二六、一五葉では、吾父假館金陵と述べている。
 (42) 文集卷二六、一四葉、祭外弟文。吾少多難。母喪弟病、而兄不顧家。吾父爲貧所驅、在家日少。
 (43) 文集卷二二、六葉、甲申朔局記。某念先君雲茅居士、生平每

- 值儉歲、恨無以及人。あるいは卷二一、一〇葉、重建龍泉布金寺記參照。先君の志云々は王遂の序文にみえる。
 (44) 文集卷二六、一五葉、外弟大祥祭文。少し長いが感動的な内容のこの文章を引用しておこう。嗚呼、惟我兄弟五人、庶出者二、汝實居幼。方汝之生、吾母之死已久。父假館金陵、書報得男、吾父且喜且憂。吾今四子、猶不免於饑寒、又益一焉。……求者豫之。會有以陳氏告者。汝之所生、幸其家之近……而衣食之可營也。故乞與不斬。既與而吾父聞之、亦曰、幸甚。後此十有五年、始擢第太常。未幾而汝所生物故。又三年、吾尉江寧、而汝同胞兄又物故。吾念汝生拊育之恩、汝兄情義之篤。而吾與汝天倫、終不可泯。遂白吾父、取汝以歸。以陳氏父母老……使仍家陳氏、而往來兩間。比陳氏父沒、……始使汝將母而歸、與吾同門而異戶。後有十餘年、而汝母始沒。生事死喪、展也無憾。また同卷一七葉の外弟諸子歸宗告家廟文には、庶弟が劉家に戻ったのち、爲之娶婦、爲之立家。亦既有子、子又生孫矣。とある。そして弟の死後は、後有科役、非異姓親所能庇と考へ、俾其一家盡還劉姓。惟留已娶之子、爲陳氏孫。とした。
 (45) 文集卷三二、一一葉、繼室安人梁氏墓誌。餘兄少負不羈之才、投筆從軍。以是獲戾於先君、絕不復歸。因納婦軍中。時惟一女二子。余官江寧時、已歸其長子。既至儀眞、盡取其次子以歸。陶氏との婚姻については、文集卷二六、一三葉。卷二八、二〇葉。卷三〇、一六葉などを參看。
 (46) こうした點は、文集卷三二、一一葉。卷二八、五葉を參看。
 (47) 文集卷二六、一六〇七葉參看。

(49) 文集卷八、二葉、通知鎮江傳侍郎には、一第二十年、銖積寸累、乃得田二三頃。……悉舉以授兄弟。とある。梁氏の墓誌銘では「分」とあるが、ここに「授」といっているのが事實だろう。

(50) やはり、文集卷八、二葉に、浙東之歸、復買田百畝、於是仰以自給。とある。

(51) 至順鎮江志卷二、七葉。漫塘劉宰宅、在後礮橋北。

(52) 至順鎮江志卷一九、二七葉にある宰の略傳には、子符見仕進類とあるが、校勘記の説明どおり、今本には仕進類を脱去していて内容を知り得ない。

(53) 文集卷三〇、一二葉、林郎中墓誌銘。余時年少氣銳、視天下事、若無足爲。また卷七、一葉、上史丞相。某愚不肖、少雖妄意事功。

(54) 文集卷二八、一〇葉の吳郎中墓誌銘と、一六葉の陸祕書墓誌銘を參看。

(55) 高廟艱難三十年、欲靜而不得靜。孝廟積累二十七年、欲動而不得動。權臣輕動於一朝、陛下唯唯從之。往事已矣、自今……何可不察（文集卷三〇、一一葉、林郎中墓誌銘）。

(56) 文集卷二三、八葉、上錢丞相論罷漕試太學補試判子。ここでは科擧の弊害として、一曰冒名入試、二曰同場傳義、三曰換易卷頭、四曰計屬暗號、五曰計會文房があげられている。こうした弊害と士風については拙稿、「宋代考場弊端——兼論士風問題」（『慶祝李濟先生七十歲論文集』）一九六五年、一八九～二〇二頁を參照されたい。

(57) 文集卷七、二頁、上史丞相劄子。佛然忿異議之來、而幸其同

則止。戚然慮事變之作、而幸其平則止。糜之以爵祿、而恩意有時而窮。

(58) 文集卷六、七葉、回宜興趙百里。

(59) 文集卷六、九葉、回句容吳百里（二）。

(60) 劉宰は權貴を喜ばず、自ら賦性疏率で多忤と稱している（文集卷六、一五葉。文集卷七、九葉）。事實その書信は、放蕩之餘、筆縱字大（文集卷七、一三葉）で、時には文面を刪改したままで直さなかつたり、轉倒記號をいれて送つたりしたこともあつたという（文集卷八、八葉）。

(61) 文集卷二、一八葉。卷五、二葉。卷三六、七葉。ならびに卷六、二葉。卷八、一四葉を參看。

(62) 文集卷一、一四葉、寄江東眞漕。

(63) 文集卷二四、一四葉、書眞西山江漕江東日、與建平尉兄往復救荒曆後。

(64) 文集卷一〇、七葉、通知泉州眞侍郎。一〇葉、通眞侍郎。

(65) 眞德秀が「包容」式の籠絡を受けなかつたことは、續資治通鑑卷一六二、四四二四頁に見える。

(66) 文集卷一〇、八葉、回眞侍郎。この中で、先辱手書。書所不具者、又從友人得之。今聞一意求去、無乃遽乎。と書き送っている。

(67) 文集卷一〇、八～一〇葉。

(68) 文集卷一、二四葉及び卷二五、一〇葉。

(69) 文集中ではそれらをあまり多くは採録していないが、卷九、三～一三葉。卷一三、一～一五葉。卷一五、一～九葉などを參照。

- (70) 拙稿「南宋君主與言官」(『清華學報』新八卷、一、二合期)、一九七〇、三四三頁を参照。
- (71) 彼に關しては『宋人軼事彙編』卷一八に記事がみえる。宅之は嵩之と不仲だった。
- (72) 文集卷一五、四葉、謝史守招鹿鳴宴では、某疾在膏肓、形於面目、既有歎於看鏡、遂絕意於著鞭。と書き送っている。
- (73) 史時之への二つの書信は、文集卷六、一一葉以下に見られる。
- (74) 劉宰は「病鶴吟 上黃尚書」の中で、加以不可療之疾、分甘屏處。忽冒公學、豈惟駭聽、上玷師門。(文集卷四、一〇葉)と述べ、また文集卷二七、一葉には祭黃尚書文があり、某揆迹雖疏、受知貴重とし、その關係淺からざることをのぞかせる。
- (75) 文集卷八、二葉、通知鎮江傅侍郎。
- (76) 文集卷一二、三葉、回張和州。
- (77) 文集卷三〇、八葉、林郎中墓誌銘。
- (78) 宋元學案補遺で、劉宰と張栻が文通していたようにいうのは時代の關係からいって誤まりである。なお、文集卷二八、八葉の吳汝英の墓誌銘では、當時嶽麓書院には陳傅良がおり、吳汝英が同僚として参加した旨記述されているが、宰と汝英の子供同志が知合いだったというほか、嶽麓書院を媒介としたような關係は見られない。
- (79) 文集卷一九、一七葉、送邵魯子序。今二先生之書具在、而晦庵朱先生諸書、其論說益精。
- (80) 文集卷六、七葉、回宜興趙百里。
- (81) 文集卷二三、一葉、新淦縣社壇記。龍雖靈、物之生者耳。……其所以祭川澤之神云者、以其神之能便是物(龍)也。今也、不於其神、於其物、……得乎。
- (82) 文集卷二一、一六葉、重修嘉賢廟十字碑亭記。
- (83) 文集卷二三、二二葉、平江府虎丘山書院記。
- (84) 文集卷二一、七葉、京口正平山平等寺記。余儒家者流、口不讀釋氏書。
- (85) 文集卷三、六八葉。
- (86) 文集卷二一、一五葉、慈雲寺興造記。持久不倦、……成功不居。有如此者、至於以其術自售、而不丐於人。以其贏爲費、而不私於己。皆與他爲浮屠學者不類、故不辭而爲之書。
- (87) このことは文集卷二一、一〇葉、重建龍泉布金寺碑にみえる。
- (88) 文集卷二〇、一三葉、嘉定己巳金壇粥局記。
- (89) 例えば文集卷一、一九葉、大霄觀の記文は、介余甥蔡天成謁余爲記。余素不爲老氏學、數謝不能、而二人請不已。因思老氏之道、雖非吾所謂道、要亦有數焉。……亦省嗜欲、薄滋味、養生全眞、而不爲市道所溺。其於世教、可不謂有功乎。……余故不復辭而爲之書。(文集卷二三、一七葉)とある。
- (90) 文集卷三、五葉、簡張繫齋以國朝四君子文易南華經。
- (91) 文集卷二一、二五葉、希墟張氏義莊記。卽捐所置義興良田四百畝、別而爲之……義莊世所難、君既創而爲之矣。このほか彼は陳氏の義莊記も書いているが、それは、所撥田、以畝計、凡一百四十。歲收米、以石計、凡一百二十云。という規模で、收其半之入、以贍族、餘以贍學事。(文集卷二三、七葉、洮湖陳氏義莊記)のように運用されていた。
- (92) 至順鎮江志卷一三、以歲旱澇、率鄉人禱雨暘、輒應。(劉宰)囑縣尉修治之。錢米取之義社廩。又家出錢與竹木、相其役。繚

以堵牆、表以門道、植松柏數百株。又買民屋十間、建齋祭所。

- 93 文集卷六、四葉、回周馬帥。近懇常平使者、得錢、創社倉於里中。

- 94 文集卷二、九葉、南康胡氏社倉記。なお卷三、桂山君墓表には、紹定改元春、漫塘叟劉某、與郷之士、會社倉なる一文が見える。

- 95 文集卷六、一七葉、通胡伯量。某郷間社倉、稍稍整齊。間朝路中、時有議者。今現在米、本不能數千石、而論者已謂其多。深恐小遇水旱、必有科擾之患。

- 96 Brian E. Mckenight, *Village and Bureaucracy in Southern Sung China*, 1971, pp. 162—169.

- 97 文集卷二、二一葉、義役莊記の末尾を、乃書其略、而疏義戶姓名於下方。又列山與田之號段、晦角疆畔所至、檻於莊之壁。使來者知其父祖、嘗從事於此、不敢替厥承云。と結んでいる。

- 98 文集卷二、一六葉、鎮江府減秋苗斛面記。州縣受常賦之輸、有耗有費。未免取贏於正數之外……乾道間……始於正苗一石之外、定爲三斗八升之數。……斛斗更易、官吏並緣增加、視正數幾倍徙……乃盡索府縣倉斛斗、一準文忠院所頒、更新之。

- 99 例えば文集卷三〇、七葉、王進士墓誌銘には、金壇人。父顯道以醫聞。士朋少爲士、爲醫、爲賢など見える。

- 100 文集卷三、二三葉、醫僧宗可塔銘には、故金壇大族……父子多而貧。命可出家、禮故醫僧文範爲師。……繼其業。人以醫招、必往。用藥謹審、不以貧富二其心。とあり、また、卷三六、一葉、陳文瑩哀辭では、少孤……屬其弟以學、去而爲浮屠。……曰、吾觀音師、以慈悲心濟物。可推是心者、惟醫乎。

即從屠屠氏之爲醫者游。凡浮屠氏之爲醫者、與俗浮沈、惟利是嗜。君所與偕、汲汲封植、以遺其後。と述べられている。

- 101 文集卷八、四葉、回知鎮江史侍郎三。伏拜臺翰、以某寓居之邑、開賑濟局。不鄙委令、與今佐、講求利病。……伏念某……

今不但形容變改、心志亦彫落……那能出入公門、參預荒政。……謹以所著荒政編一冊上獻。其間自始至末、纖毫備具。蓋其少壯所嘗親歷、非道聽臆說者比。乞付局討論。

- 102 なおこの記文は後半の重要部分が省略されており、それは『江蘇金石志』卷一五、一五葉以下の金壇縣嘉定甲申粥局記に於て補える。

- 103 文集卷三、三葉、故知安吉縣趙奉議墓誌銘。嘉定甲申歲大饑。有飯饑者、事半而力不贍。君實緝之。

- 104 文集卷二七、一二葉の甲申粥局謝獄祠祝文では、粥局は歷日五十有六、役工數十と記されている。

- 105 至順鎮江志卷一。鎮江府先賢祠のある一室には、郷里の先賢、蘇頌、陳東らとともに劉宰と王遂が、また金壇縣の先賢祠では、周敦頤、二程、朱熹、張栻の後に劉宰と王遂が加えられている。

- 106 William Theodore de Bary and the Conference on Ming Thought, *Self and Society in Ming Thought*, 1970, pp. 146—148, 183—223. Ronald G. Dinerberg, *The Sage and Society in the Life and Thought of Ho Hsin-yin*, 1974.

- 〔後記〕 この論文の著者劉子健博士 (Dr. James T. C. Liu) は現在アメリカのプリンストン大學東アジア學科 (East Asian

Studies)の教授で、宋代史を専攻されている。主著には、*Reform in Sung China: Wang An-shih and his New Policies*, Harvard Univ. Press, 1959, *Ou-yang Hsiu: An 11th Century Neo-Confucianist*, Stanford Univ. Press, 1967. などの單行本のほか多數の論文がある。思想史と社會史、政治史の接點を取扱ったユニークな研究が多く、また Sung Project の有力なメンバーとして國際的に活躍しておられる。日本の學界に對する理解と關心も深く、『東方學』や『青山先生古稀記念宋代史論叢』などにも寄稿されていることで御存知の方も多からう。この論文は、

中國文で書かれ、「劉宰（一一六五—一二三八）和脈飢——申論南宋儒家的階級性限制社團發展——」という標題が附されている。今回『東洋史研究』に掲載させていたくにあたつて、教授の了解を得て、全體を約半分に縮め、純然たる翻譯ではなく、日本の讀者にできるだけ理解していただきやすい形に書き改めた。原文の誤讀による誤まりや教授の眞意を正しく伝えぬ部分があれば、それらはすべて私の責任である。なお本稿作成にあたつて、京都大學大學院の木田知生君に協力を得たことを附記する。

〔梅原 郁〕

A Short Essay on Liu Tsai 劉宰

—The Course of a Southern Sung 南宋 Gentry—

James T. Liu

Abstracted and Translated by Umehara Ka'oru

Liu Tsai (1160–1239) was a man who, just past the midpoint of the Southern Sung period, after holding several provincial offices, resigned and spent the remainder of his life at his home in the Chin-t'an district 金壇 of Chenchiang 鎮江. In this essay I first regard the *Ching k'ou chih chiu ch'uan* 「京口耆舊傳」, until now a work of unknown authorship, as Liu Tsai's work, and then, using the *Man t'ang wen chi* 「漫塘文集」, collection of his writings, I have tried to make a chronology of his life. I also have examined his activities at his home after his retirement through the categories of his exchanges with bureaucrats and literati, thought and social activities, and have depicted him as a gentry figure of what may be called the Southern Sung type. In particular, his private welfare activities directed on three occasions towards more than 10,000 starving people should be noted. Finally I have presented some of my own ideas concerning the reasons why his typically gentry-like activities were not taken up by a larger social group.